

「信州そばの会」御嶽講 三井 勝人

この度、片柳至弘主幹宮司様のご指導によりまして「信州そばの会」を發講した三井と申します。

既存の講は地域などのつながりで成り立っておりますが、そういったつながりは全くありません、また「そばの会」と申しましても世間で流行っている趣味の手打そば同好会でもありません。

この会は平成十年八月数人の飲み友達の集まりが始まりで、現在十名の男女がおりますが皆そば好きと清酒好きの酒徒であり、経歴も違った持ち主が聞きつづてに集い数カ月に一度は杯を交わし、数年に一度は信州にそば旅行に出かけ絆を深めております。講にも数々あると思います私が私たち「そばの会」は異例の講と言える



のではないかと思います。私が初めて主幹宮司様と会ったのは平成十三年四月樹々の新緑がまばゆい季節に御嶽山頂に鎮座する武蔵御嶽神社を参拝し、宿坊「山楽荘」で体験泊をした時でした。宮司様のご親戚で日本舞踊家・花柳時寿朗先生と一緒に幼稚園に勤務していたことから案内をされ、不安のか初めて宿坊泊を体験しました。普通の旅館であり安堵し菓草風呂を楽しみ薬膳料理に舌鼓を打ちました。

宮司様に「信州そばの会」としての集団参拝を打診しましたところ、心よく受けて頂き平成十四年三月に「信州そばの会」第一回目の武蔵御嶽神社参拝と相成りました、またこの時に宮司様から正月参拝を勧められ翌年の第二回目より一月

の成人式前後の土曜日曜を利用しての参拝が始まり平成二十三年一月まで、標高九二九メートルの厳寒の中一年たりとも欠けること無く連続十年参拝をなす遂げました。

寒さで床から抜け出るのに勇気がいる夜も明けきらぬなか宿坊を出発し水張りの参道を神社まで十年間、会員のだけ一人として弱音を吐かず続けて来ましたが何が続けさせたのか、やはり御嶽山頂で日の出を迎え神殿にて御祓と昇殿玉串奉納で精神作用の元となる魂と心の気・やる気を目覚めさせたせていただき「元旦祭祈禱神聖」を拝受し家内と身上安全を祈願して、私の一年間の心の準備が出来、また今日まで無病息災で生活出来ていられるのが継続させた源ではないでしょうか。

十年間の御礼の印に「猷灯奉納」を申し入れ致しましたところ宮司様は心よく受諾され、そばの会員協力のもと平成二十三年七月に武蔵御嶽神社分室「山楽荘」神苑に建立させて頂くことが出来ましたことは私の一番



の慶びであります。十一年目の平成二十四年の参拝の時、宮司様から「三井さんこれを機会にそばの会の講を作りなさい」と勧められ、講についてのご指導を受け遂に發講に至ったものです。小さな講でこれから何が出来なのか一抹の不安一杯の出発ですが、そばの会員と更なる絆を深めつつ、連続二十年参拝を目標に、無理なく楽しみながら「信州そばの会」講をこなたに継続して行きたいと思っております。武蔵御嶽神社の益々のご隆盛、ご發展と併せて片柳至弘主幹宮司様と宿坊「山楽荘」皆様のご健勝をご祈念申し上げます。

皇太子殿下御岳山登山行

片柳 茂夫

それは突然のことだった

九月半ばのある日、私の勤める御岳ビジターセンターに東京都より一本の電話が入った。電話の相手は今までお会いしたこと、ましては会話すらしたこと無い本庁の課長であった。都の末端の一施設に本庁から、しかも課長から直接電話が入ることなどまずあり得ない。何かとんでもない出来事がおこったかと思えなかつた。思い浮かんだのは都民の方からのクレーム。実はこれが一番怖い。利用者からの電話、あるいは直接の対応が悪かつたなど、当方としては思いもよらないことでクレームが入る事もある。お叱りを覚悟で電話にでた。

ところが、話を伺うとそれはクレームでも何でもなく、神社を含めた登山の案内ができるかとのことであった。当然いつも行っている業務の一つであるので、問題なく可能であるとの返事をした。その後の課長の一言、「それでは、皇太子殿下のご案内も大丈夫ですわね。十一月十三日は空けておいて下さい。」



後ほどコース等は連絡します。ただしこの件についてはオフレコでお願いします。」とのこと、一瞬間が固まったが了承の返事をするしかなかった。

こうして、皇太子殿下の御岳山を含めた登山行のご案内を賜ってしまったのである。登山の下見

あらかじめコースを聞いた後、その山行のコースタイムを報告し、実施の方向に至った。そして十月二十三日、この日は下見の日である。普段私たちが行っているイベントの下見位のつもりでいたら大間違いであった。ケーブルカー滝本駅は朝からとんでもない騒ぎになっていた。東京都や青梅市のお役人は元より、警察管、皇宮警察などすごい人数である。ケーブルの社長や常務なども落ち着きがないように見えた。当然の事ながら私も少し安易に考え過ぎていたことを反省した次第である。こんなに大人数で下見をしなければならぬなんて、さすがは皇太子殿下の山行である。そんな警備の人達の中に、青梅警察署山岳救助隊の金さんの顔を見つけちよつと安心した。金さんは前回の皇太子殿下の山行の案内をした人である。金さんが一緒に行くのであるならば、むしろ私も適任であると思う。そんな金さんから声をかけられ、「なんだ今回の案内役は片柳君か。なら安心だな。」などと大きな声で話しかけられる。ちよつと待てよ、これはオフレコだ。そんな大きな声で話して大丈夫なのか？

全員が揃うと、殿下がお休みになる場所、駅構内でのルートなど、警備の人達によって念入りに行われるのだが、私は特にすることもなく、そんな様子を遠くから大変だなと思いつつ眺めているだけであった。



そしていよいよケーブルカーに乗車という段階になり、殿下の侍従、Nさんを紹介された。当日のお迎えの位置、エスコートの仕方などの確認が終わるとNさんより、「殿下は、今年とても忙しくて中々山を歩く機会が作れません、当日を楽しみにしていらつしやいます。今日は私を殿下だと思つて、当日の様に案内して下さい。」承諾しましたとは答えたものの、さてどんな会話をすればいいのか気がかりである。

殿下の山好きは、皆さんもご承知のことと思われる。足もお強いと伺っている。そのため、今回の下見ではいつも仕事で案内する時よりも少しペースを早めに歩いてみた。神社そして日の出山、予定のコースタイムである。日の出の山頂では、ここでプレスが集取材を行うとのこと、殿下をエスコートしてからの立ち位置の確認を行ったのだが、このとき、決して体や手がカメラと殿下の間にかぶらない様に十分注意して下さいとのことである。

愛宕神社から先は登山道がとも滑りやすくなつてくる。ここで侍従のNさんが一言、「こんなところで殿下がもし転んでしまったら、昔だったら切腹ですよ。」この一言で、やばい！こはゆつくり歩くことにしよう」と心に決めた。できれば当日は道が乾いていますようにと祈るばかりであった。ともかくにも緊張した下見は終了した。いよいよ本番

十一月十三日当日。快晴とまでは行かないが、まずまずの登山日和である。滝本駅で殿下の到着を待つ間、ケーブルの社長より殿下の大学生時代のことを伺った。聞けば社長は、殿下の学習院大学の二つ先輩にあたり、構内ではよく見かけたとのことである。そんな時、後二分で到着という連絡が入る。しかし道路を上る車の音は乗用車ではなくバスの音である。ここで予期せぬ出来事が起こった。予約無しに団体のツアーバスが到着してしまつたのである。このまま乗客を降ろせば殿下の到着と重なり、ある意味でパニックになるであろう。社長の機転は速かつた。殿下が駅舎内に入るまで、乗客にはバスの中で待機してもらい、しかる後速やかに誘導して臨時ケーブルを発車させ事なきを得た。さすが社長と感心した次第である。

さて、殿下の準備も整い登山の始まりである。乗車前のご挨拶、初めての対面である。当然ではあるが、いつもテレビなどで拝見しているお姿そのものである。物静かで貴賓のあるお言葉、生のお声を聞いて緊張が高まつてしまつた。最初はどんなことをお話ししたらよいかとか、話し方は？ 接し方は？ など考えていたが、ここに来て度胸は決まつた。ええい普段通りでいい。殿下はなぜ今回の山行に御岳山をお選びになつたのか、それはお話を聞いて解つたことだが、御岳山の歴史、特に御師やその